市田柿コラム

市田郷の人々の伊勢信仰と松岡城主の信仰心

調査によって復元された松岡城・松岡南城跡鳥瞰図（宮坂武男作）

鎌倉時代に市田郷の地頭となり、市田と山吹の全域を、鎌倉〜戦国時代の五百年にわたって支配し続けた松岡氏。松岡氏に関する史料は、残念ながらほとんど残されていません。しかし、市田柿発祥の地である伊勢社の建立につながる、市田村の人々の信仰心の篤さは、松岡氏の影響が強いと考えられています。

　現在の高森町市田に松岡城が築かれたのは、南北朝以降だといわれています。室町時代には、信濃の守護、小笠原氏の勢力下で遠征軍を出すことはあったものの、城下は安泰し、繁栄を極めました。

　信仰心の篤かった松岡氏は、臨済宗に帰依していたといいます。松岡城の築城とほぼ同時期に安養寺を開山したほか、諏訪明神社（萩山神社）や松源寺などの創建にもかかわっています。松岡城を挟んで下段に安養寺、上段に松源寺をそれぞれ建立しており、臨済宗を城下に広めようという意図があったのではないかと想像されています。

上市田の伊勢神社本殿。大正2年（1913）に合祀された荒神社（あらがみしゃ）は松岡氏の創祀といわれている

　また、諏訪市にある諏訪神社上社の祭事を執行する御頭（頭番役）と呼ばれる大役を三十年間に六回も務めました。御頭の際には、御符之礼として三貫三百文を、御頭足と呼ばれる祭費に二十貫をそれぞれ贈った記録が残されていて、当時の松岡氏の繁栄ぶりが伝わってくるようです。御頭役に当たらなかった年も、城下の萩山神社領内の御射山で御射山祭という狩猟神事を行っていました。

　このような、松岡氏の敬神崇仏の精神が領民に広まったのが理由かどうかは定かではありませんが、江戸時代の下市田村では伊勢信仰がさかんだったと伝えられています。江戸中期には、伊勢神宮の分霊を勧請した伊勢社が建立されたり、伊勢講を組織して代参（代表して社寺を参詣すること）が行われました。

　伊勢社には御師が寝泊まりする建物（伊勢屋敷と呼ばれた）が作られていますが、ちょうど御師制度が確立した時期でもありました。御師とは、各地の農村に出向いて暦を配ったり、豊穣祈願をして伊勢信仰を広める一方、伊勢詣でに来た代参者を案内したり、食事をふるまうなどの宿泊の世話をしていた伊勢神宮の神職のことです。

第2章

市田柿を育て広めた先駆者たち

市田柿を生産し、中央市場へ出荷した上沼正雄・鉄男親子、接ぎ木の技術を用いて苗木を販売した福澤利喜三郎・伝蔵親子、人脈を通じ市田柿の名声を広めた橋都正農夫、壮年団長として栽培農家を増やし、生産力向上に力を注いだ酒井安、立石柿の産地、飯田市三穂地区に市田柿を定着させた宮沢熊太郎ら、先駆者を紹介します。